

「すみっちょ」を楽しむレッスン

ガンジー

ぼくがコントラバスを始めたのは大学在学中、二四歳の頃です。音大出身でもないし、楽器に関しては完全に独学です。

沖繩では、ジャズの人もハードコアの人も、みんな同じライブハウスに出るのです。東京なら例えばラテン音楽だけでも一つのコミュニティがつくれますが、沖繩ではそれは無理です。人が少ないから、ミュージシャンの貸し借りが起きる。ベースはだいたいジャズの人に頼むことになるし、ピアノなんて、クラシックの人に譜面を書いて渡したり。ぼくはなんでもやりたいタイプなので、それがちょうどよかった。東京のような大きな街にいたら、きつと曾我大穂と出会うことはなかったと思います。

沖繩で大穂たちと「CINEMA dub MONKS」を組んで一年ほどが経ったとき、大穂が「どうも塚があかないから、海外に行きたい」と言い出して。なんのつてもないのに、スペインのバルセロナに行ってみることにしました。当時、ぼくは予備校講師の仕事をしていたので、春休みの時期に一月休みをとって。行ってみたら結構人気が出て、そのまま残れば売れそうな感じになった。いったんみんなで帰国しましたが、翌年の夏頃から、仕事を休めないぼくの代わりに東京のベーシストの方を入れて、また半年ぐらい行っていましたね。最後の二か月ほどは、ぼくも再び参加して。帰国後はまたずっと沖繩で、たまにライブをやるという日々が続きました。

大穂とやるのはおもしろかったです。アドリブ演奏に強いし、オリジナル曲でジャズをやる人と通じるところがあるので、違和感はありませんでした。畑違いで基本的に相性は良くないはずなんですけど、でもなんか続いていますね。

ぼくにはこだわりがあんまりないんです。自分から「これをやろう」と人を誘うわけではなく、話があれば、「じゃあやってみよう」というタイプで。いまのところ嫌な人と当たったことはありません。やってみると何でも楽しいんですよ、音楽って。

大穂もスズキくんも渡辺くんも、舞台や映画、サーカスなどいろんな総合芸術を観てき

ているけれど、ぼくは全然観ていなくて、造詣が深くない。考えるのは、出し物とは何か、どうあるべきか、お客さんは何を楽しみに見にきているのかということばかりです。ぼくは音楽のコンサートには行くので、音楽ならどうすればおもしろく感じるかはなんとなくわかります。でも「仕立て屋のサーカス」を客観的に見たことがないし、通常のサーカスとも全く違うので、参考にしようがない。ずっと考えてはいるけれど、答えは出ていませんね。そんなに簡単に出るものでもないでしょうけれど。

足を運んで観に行くことはあまりしませんが、本は読みます。伝統芸能の成り立ちを書いた本は、参考になるような気がするんですよ。多くの芸能は、「河原乞食」が野外でやっていた芸を見る人が出てきたところから始まっているし、音楽家も、不遇な人が生活のために始めることが多かった。そういうことをよく考えるんです。音楽とは何か、といった哲学を描いた本もよく読みます。なんとなく弾いているんですけど、どこかに哲学を携えていたのかもしれないね。

仕立て屋のサーカスでは、多様なものの見方を提示できたらいいのかなと思っています。ぼくのおもしろいと思うポイントって、あまりに小さくて、他人に言うことじゃなかったりするんですよ。公演の最中、音がだんだん下がっていつてほとんど消えたようなところ

で、スズキくんがチョコキンとはさみを鳴らしたとか、布をシューッと裂く音がしたとか。なんちゃあないことですよ。でもそれを「ああ、こういうの美しいなあ」と思うんです。それを「ほら、ここがおもしろいでしょ？」と全員にわかるようにはつきりと提示するやり方もあります。現代のエンターテイメントの多くはその方法をとっているし、誰が見てもわかることを徹底したハリウッド映画やディズニー作品は、すごいと思います。でもそれはどうもしたくない。できないです。だって、見ている人自身が偶然見つけるほうが、おもしろいじゃないですか。散歩していて、なんの変哲もないスズメをすぐくきれいだな、と思うことがあったとして、それを「ほら、キレイでしょう？」とわざわざ取り上げることはしたくない。ぼくなら押しつけられると、ちょっと引いちゃうと思います。仕立て屋のサーカスには、そういう要素がふんだんにあります。普通の舞台グループにはもつと確固たる本体があるのですが、仕立て屋のサーカスでは、すみっちょにおもしろいものが転がっている。ぼくはそういうところが好きなのだと思います。

ジャズも、すばらしいメロディだけを期待する音楽ではないので、わからないと言われがちです。でも、演奏者一人を中心にしてみると、グツとおもしろく見えてくる。それは考えてみれば当たり前のことで、つくっている人の立場になってみると、作曲・演奏している人自身は、確実に好きだからやっている。そんなふうに丁寧に考えて作られた曲

をわからないと感じてしまうのは、観客としてその曲にコミットしようとしていないからだと思うんです。野球観戦に行っても、漠然と見ていてもおもしろくありませんが、どちらかのチームのファンになれば、俄然おもしろく見られますよね。一人好きな選手でもいれば、その人を中心に見るから、全体としてもおもしろい出し物と感じられる。そういうことなんだろうな、って。

海外の人は、そのへん慣れていきますね。「自分にはこう見える」を大事にしている。仕立て屋のサーカスのお客さんもやたらと意見を言いに来て、うるさいぐらいです。

仕立て屋のサーカスではさみの音が楽しめる人は、きっと日常生活でも「ああ、いいねえ」という音を見つけることができると思います。他人に説明するほどのことでもないけれど、なんかいいな、好きだな、という些細なものを、まるで盆栽を眺めるように楽しめたら、人生は少し豊かになる。音楽なんてなくても生きていけるものですし、すごい効能があるわけでもない。でも、知っているといないでは、やっぱり違う人生だと思うんです。CINEMA dub MONKS も細かいところを大事にするバンドですが、仕立て屋のサーカスはさらに要素が多いし、本体不在感じが強いから、何を見るものなのか説明がしづらい。でも、わかりやすい本体が前に出るということはすなわち、細部を捨てることになる。そ

のバランスは難しいですが、お客さんを楽しませようという気持ちメンバー全員にあるから、前衛美術の実験のようにはなっていない。バランスが取れているのでしょね。あくまで出し物として、お客さんには楽しんで帰ってもらいたいんです。

ぼくにはどうも既存のものを擁護するところがあつて。オーソドックスなジャズも、今やガチガチに既存のジャンルで、しかも斜陽です。いつまでやってんの、と言われがちなのに、それをどう楽しむかを考えたい。仕立て屋のサーカスの楽しみ方を覚えることができたなら、結構何でも楽しめることがわかつて、いろんな出し物を観に行ってみようという人が出てくるかもしれない。そうなったら、すばらしいですよ。そんなふうに種が蒔けているとしたら、ぼくらの試みに意味があるということになりますから。

【注】

★45 仕立て屋のサーカスの公演で、通常の舞台ではかき消されてしまうような物音までが印象的に響くのは、初期の頃から音響を担当するP.A・藤田恭久の仕事が大きい。「実際の音の響き方は、会場にお客さんが入った時点で初めてわかります。音を遮る布の量によっても、客席数によっても響き方が違ってくる。お金をかければいくらでもよい機材は入れられますが、彼らのように会場にあるものでやる場合は配置が決めます。彼らが音響で重視しているのは、自分たちのモニタースピーカーの音が客席までそのまま届くということ。そこを外さないように気をつけています」(藤田)。